

防災講話 ～阪神・淡路大震災 27 年を迎えて～

震災 27 年目を迎えました。現在、コロナで 2 年間見合わせていますが、東遊園地で行われる追悼式典に本校合唱部や柔道部が参加していたことも懐かしく思い出しています。約 1 週間、朝の防災学習にもしっかりと取り組めたでしょうか？

さて、記憶というものはいつか薄れて消え去るものというのが定番ですが、私にとって阪神・淡路大震災は忘れることはできません。小学校 6 年までいた神戸市東灘区は壊滅し、友人の死も伝え聞きました。高校剣道部の同期生も職場で亡くなりました。今日本は地震の活動期に入ったと言われ、全国各地で地震が発生しています。27 年と言えばだいぶ前に感じますが、地球の歴史からするとほんの一瞬。そう考えると阪神・淡路大震災、東日本大震災も活動期の前段階であったと考えられます。そして 30 年以内に 80% の確率で起こると言われている「南海トラフ地震」はその%の高さや 100～150 年周期で実際起こっていることを考えると、確実に来ると思って、まず間違いないでしょう。

以上のような話をすると、中には怖がってしまう人がいて、その気持ちもわかりますが、大切なことは地震国日本にいる以上、「地震に対する備えをしながら生きていく覚悟をすること」「何かあった時、自分の身を守るとともに、自分が助かったら次は人のために動く」ということです。中学生はもうこれぐらいできなければ困ります。怖がって泣いているばかりではだめです。

震災をきっかけに崩れない家を作ろうと建築家になった人、人命救助に尽くす警察官、消防士、看護師になった人、多くの人の生き方を震災は変えました。ボランティアという言葉が広く普及したのも阪神・淡路大震災からです。私も神戸市の小学校に派遣されて避難先の手伝いをしました。ほんの少しのことで語る資格はありませんが、多くのことを学ばせてもらいました。

話は変わりますが、私の寝室には布団以外何也没有什么。防災バッグも用意し、毎年 1 月 17 日には点検や入れ替えをします。犬を飼い始めたのでより大変になりました。車の中には 2 泊ぐらいできる用意があります。宿泊した時は必ず避難経路を確認し、頭の上に何か落ちてきそうなところに布団が敷いてあったら、自分で動かします。地下街を歩くときは最寄りの出口を頭に入れながら歩いています。海辺の町を旅行した時は高台に目星をつけています。皆さんはこんな私を笑うかもしれません。でも断言できます、阪神・淡路大震災を体験した人は決して笑わない。そしてここまで用心していても助からない可能性だってあるのです。

27 年前の今日、間違いなく“死”が私だけでなく、何百万人の人たちのすぐ近くにまでやってきました。こんな言い方は語弊があるかも知れませんが、私たちは運よく、偶然生き残っただけです。ですから震災体験者はそのことを自覚し、語り継ごうという意思があります。運良くつながった命をこれからも大切にするという決心があります。

震災の教訓を無駄にしないことが残された者の使命だと思います。どうか皆さんも正しい知識を身につけて、身を守る努力を最後の最後までできる人になってください。

それでは阪神・淡路大震災をはじめ、災害で亡くなった方々の御霊に黙祷を捧げます。全員起立。気をつけ。黙祷。黙祷なおい。座ってください。これで先生からの講話を終わります。